

かみのやま歴史・文化財さんぽ

第4号（平成29年12月）

あゆむ「あれ、ここはこの前、金山峠に行く時、通り過ぎたよね。」

文じい「そう。ここに入ってくるころのように広い駐車場もある。」

ミドリ「うわあ、昔の大きな家だわ。」

文じい「“大黒屋”というんじゃ。」



ふみお「ここは檜下宿というんだよね。」

あゆむ「“ならげ”は聞いたことがある。“しゆく”というのは何？」

ミドリ「“宿”は“やど”とも読むよね。」

ふみお「“宿場”というね。」

文じい「ここは街道、つまり昔の道路ということだったね。そこで、ところどころに旅する人たちの宿が必要になってくる。」

ミドリ「宿を並べたから宿場と言ったのね。」

文じい「ここに檜下のようすがわかる看板絵図がある。まず、本陣。大名つまりお殿様が泊る宿じゃ。次に脇本陣。殿様の次にえらい方々が泊る宿。あとの家来の者たちは、旅籠とよばれる宿じゃ。」

ミドリ「“問屋”というの？」

文じい「人々の泊る宿を決めたり、荷物を運ぶ割りふりをしたりするところじゃ。」

ミドリ「大きい家がならんでいるわね。」

文じい「この角の家は丹野さんの家。“滝沢屋”

うしゅうかいどう 羽州街道

ならげしゆく かなやまごえ 檜下宿・金山越

その2（檜下宿）

といて脇本陣じゃった。」

ミドリ「“滝沢屋”というの？」

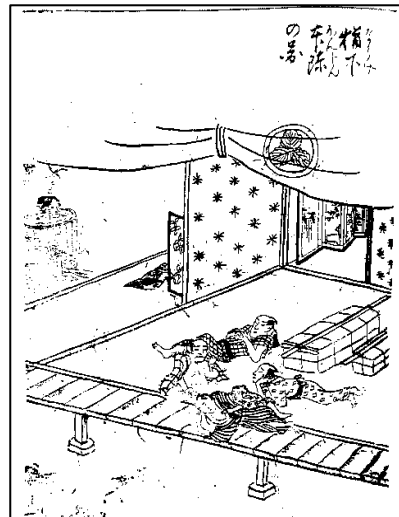
文じい「屋号とってな、家の呼び名じゃ。」

ふみお「“大黒屋”も屋号だね。」

文じい「そう、この“大黒屋”はもと、向かいの粟野さんの家だったのだが、市の文化財としてこちらに移して、家を新しくして住んでおる。」

ふみお「本陣がここかな。」

文じい「齋藤さんの家で、屋号は“塩屋”。昔は、この倍くらいの大きさだったろうな。窓の奥に殿様の名前が書いてある板「宿札」が下がっておる。」



檜下本陣の図
(風呂に入り、のんびりしている)

文じい「昔の人で“音羽子（とわ）”という人が書いたお国替絵巻に絵がある。」

あゆむ「おもしろい絵だね。」

ミドリ「次は、脇本陣“庄内屋”だわ。」



(視橋)

あゆむ「おっ、石の橋だ！」
 ミドリ「こういう橋は”アーチ橋”とか言うんじゃない。」
 あゆむ「よくこれで落ちないんだ。」
 文じい「初めはこわくて渡れなかった人もいたらしいが、上の重みが両足に分かれるしくみになっていて、アーチ橋は強い。」
 ふみお「説明板がある。明治13年にでき、村の人々がたくさんお金を出したんだね。」
 文じい「この橋は『新橋』。向こうの橋は『視橋』で、明治15年につくられたといわれておる。大事にしなければならんの。」
 ミドリ「ここは番所跡だって。」
 ふみお「村への出入り口で、通る人や物を確認していたんだよね。」
 あゆむ「こっちに道路が通っている。わざわざ曲がって橋を二つもわたらなくてもよかったのにな。」
 文じい「ここは後から通した道路で、前はコの字の形の通りだったのが、口の字の形にながったのじゃ。」
 ミドリ「コの形に何か意味があったのかしら。」
 文じい「うむ、殿様が泊っているところを守るため、何かあれば木の橋を落としてしまうということも考えていたのかもしれないの。」
 文じい「今度は武田家。今、民具の展示を準備しておる。この先に後から移した“滝沢屋”がある。木村さんに案内してもらおう。」

あゆむ「木村さんの説明は迫力があつたな。」
 ふみお「元屋敷や流れ町などから移って宿場ができたのがわかった。」
 ミドリ「それに、洪水の後に屋敷が移されてきたから新町なのね。」
 文じい「番所も宿場のできごとと共に移ったようだ。」
 あゆむ「洪水といえば、川や橋も大変だよな。」
 文じい「その通り。こわれた所をなおすのに大変な苦勞を重ねてきた。」
 ふみお「苦勞と言え、”助郷”のことも大きな問題だったんだね。」
 文じい「そう、宿場は泊めるという役目と物を運んで次の宿場まで届けるという役目があった。」
 ふみお「それで人や馬が必要なんだ。」
 文じい「そう。ところが檜下に用意している人や馬では何百人という殿様の行列が通る時などにはとても足りるものではない。」
 あゆむ「えっ、それじゃどうしたの？」
 ミドリ「それでまわりの村に助けてもらう。だから“助郷”なのね。よかったよね。」
 文じい「いやいや、それが、春の忙しい時に人も馬も取られては大変だ。それでいろんなもめごとが多かったのじゃ。」
 ふみお「宿場はそれを乗り越えてきたんだね。」
 ミドリ「景色の美しさだけではないのね。」
 文じい「ふむ、橋や“山田屋”の石垣などを見ると、苦勞と工夫の歴史がしみじみと感じられるのう。また来てみよう。」

